わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ⑱④

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

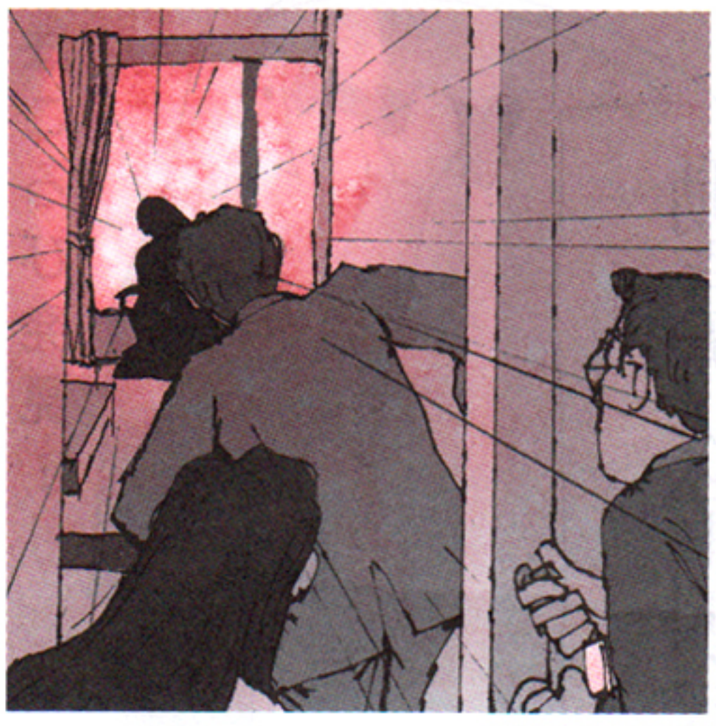
「孤独死」と呼ばないで

過労死とともに、最近マスメディアでよく目にするのが「孤独死」である。過労死も孤独死も病名ではなく、いわば社会的診断名で、これといった医学的定義があるわけではない。

三省堂の国語辞典には、「孤独」はあっても「孤独死」はないので、ネットのウィキペディアから引用すると、「主に一人暮らしの人が誰にも看取られること無く、当人の住居内などで生活中の突発的な疾病などによって死亡することを指す。特に重篤化しても助けを呼べずに亡くなっている状況を表す」とある。孤独の文字だけでもうすら寒いのに、そこに死という字が加わると、さらに救いようがない気持ちになる。

昔から孤独死はあったのだが、近年一人暮らしの高齢者が増え、近隣との付き合いが疎遠になったことから、その数の増加が目立ち社会的問題になっている。ちなみに、最新の報道では、全国における年間の孤独死は4万6000人にのぼり、その70%が高齢者だという。

死んでから何か月も放置されることが多いため、その惨状は想像して余りある。日が経つにつれウジが湧き、ハエが飛び交い、体液が畳や寝具に染み込み、吐き気を催す強烈な悪臭をまき散らす…。どんな死に方であろうが、死んだ途端に人の体は腐敗が進むものであるから、この状況は当然の帰結なのだが、具体的に文字にしたり写真を見たりすれば、誰だって気が落ち込む。



原因となるのはほとんどが心臓系や脳の疾患による発作と考えられるため、本人の苦痛は極めて最小限であったはずだ。中にはお風呂に浸かりながら息絶えたと思われるケースもあり、これなどまさに理想的な最期だろう。

問題はその後。誰もいないところで死ぬわけだから、それが不自然死とみなされ、警察の介入が始まる。1000人を看取った長尾医師によれば、孤独死とは警察が関与するかどうか、ということだと断言する。離れて暮らす家族がいれば、交友関係や預貯金など根ほり葉ほり聞かれるなど明らかに容疑者扱い。一人暮らしで身寄りがなければ、それだけ発見は遅れ、先に記したようにその残骸ゆえに部屋の貸主や近隣にとってはとんでもない事態となる。

死に方云々より、死んだ後に周囲に迷惑をかけるのが孤独死の最たる問題なのだろう。とすれば「孤独死」と呼ぶのはたぶんに違和感が残る。

多くの人がとらえる理想的な死に方とは、家族に看取られながら、無駄な苦痛を覚えることなく、眠るようにあの世に旅立ち、皆が嘆き悲しんでくれる…。というものだろうか。しかし、それを叶えることは甚だ難しい時代になったのだ。

急速に進む高齢化、過剰な終末期医療や延命治療、病院死ではなく在宅医療への転換という強引な流れを推し進める政策…。自分の死に尊厳を持ちたいと思うのなら、むしろ孤独死がいいと考えている人も決して少なくはない。

これから確実にやってくるのは「多死社会」だ。一人暮らしであっても家族がいても、周囲への迷惑を避けるために、日ごろから近隣との関係を維持しておくことは大切だ。早くからエンディングノートを書いておくのも手だろう。

その上で、尊厳ある孤独死を覚悟することは決して不幸ではない。当たり前だが、死ぬときは皆ひとり。その覚悟を持てるかどうかは、ひとえにその人自身の生き方にかかっている。

イラスト・伊藤栄章